

豚妖怪の考察

——耳切れ豚の出自——

田 畑 千 秋

一 はじめに

奄美、沖縄の夜はムン（モノノケのモノで、人間界でなく異界の物、妖怪、悪霊、死霊、精霊等と訳される。ムンは琉球方言の特徴の音がU音となり、末尾の母音がとれたものである。Hono ↓ munn ↓ mun 地域によってはムヌというところも多い）の世界である。奄美では「夜がとる」といい、夜そのものをも恐れていた。夜にうごめく個々のムン以前に、夜そのものが恐怖の対象であったのだ。その恐怖の根底には、闇への怖れという人類普遍の感情があるのである。

この稿ではその夜にうごめくムン達の中から、豚のムンに焦点をあてて論じる。それによって奄美、沖縄のムンの性質を特徴づけ、夜の恐ろしさも再確認できると思うからである。ちなみに豚のムン

はヤマト（鹿児島以北の日本。以下同様に記す）にはいないが、外国には多くみられる。たとえば中国の『西遊記』の猪八戒はあまりにも有名である。また、『山海経』には𪛗^{（はいまう）}封が記されている。それによると、𪛗封は巫咸の東にいて、その形は豚のようで、前後いずれにも頭があり、黒色だという。絵図もあり、上半身のみが豚が二頭くっついていて、足はそれぞれ前足二本ずつを持ち寄って立っている。両方が歩こうとすると前後に引っぱり合うことになる。一生互いに引っぱり合っていかななくてはならない宿命を背負った豚のムンである。^①『搜神記』八巻本には、夜這いする雌豚の話があり、これが拙稿「美女に化ける豚」^②の記載文芸としての最先行資料となるものである。これによって奄美、沖縄の「美女に化ける豚」が、中国の影響下にあることはまず確認せられる。『聊齋志異』の「杜翁」^③も好色のため豚にされた話で、「豚とセックス」を考えるうえ

で重要な資料である。奄美、沖縄の色好みの豚も、中国のこれらの伝承を抜きにしては論じられない。

他に南米アルゼンチンには鎖つきの雌豚（チャンチャ・コン・カデナス）、ブリキの雄豚（チャンチョ・デ・ラタ）がいる。また、「エントレ・リオスの町や村では、少女たちが屠殺場付近に住む若者を避ける。土曜の夜ごとに、この若者たちはいま挙げた動物たちに姿を変えるからだ」という伝承もある。若者たちが屠殺した動物たちに姿を変える、というのは、日本ではなじみがないが、諸外国においては魔法によって動物に姿を変えられる話がよくあり、不思議なことではない。しかし、その根底には、屠殺された動物の怨霊が土曜の夜ごとに姿を現すということを語っているのである。

このように日本では奄美、沖縄にしかない豚のムンも、豚を家畜として、長い間ともに生活してきた中国をはじめ諸外国には、案外広く存在することがみとめられる。このことに関しては、『捜神記』説話にみる豚妖怪^⑤と題し、別稿に論じた。それでは奄美、沖縄の豚のムンの実態を分析して、その出自を探ってみよう。

二 フーシンコの岩神さん

― 神に祀られた豚のムン ―

徳之島町井之川集落のほぼ中央部に、「フーシンコの岩神さん」が祀られている。徳之島町文化財指定台帳に、「この岩にはふだん

はお祭りしないが、春秋、彼岸の中日には区長が酒と米の初を届ける。これは石をよりしろとする石神信仰と思われる。伝説では、この岩から豚の子が果てしなくとび出ていくのを月夜に見た人がおり、豚の子は学校屋敷跡をまわってアムトガナシのところに全部入って消えたといわれ、この岩神を粗末にしてはならない」と、その文化財指定事由が明記されている。月夜に豚の子が果てしなく飛び出してきたというだけで、すでに妖気が漂うが、その消え入ったという場所が集落の神祀りの場であるアムトガナシであるという、さらにその異空間をふくめて暗示的である。実は古老たちによると、この子豚共は、単に月夜に岩から飛び出して、学校屋敷跡をまわり、アムトガナシに消え入っただけではない。その途中で出会った人を死に至らしめているのである。次の事例は本田碩孝の報告である。

【事例一】

わーきや 敦仁だが、中学校ベーり、なーぬ Mぬ とウじぬ
もーりし くウとウし 二五年べ なるん。もーりしが九月べ、
はまうり うん とウきんべ あしが。うん とウしちよ。わー
きや敦仁た 勇さんたえッ、ぐわらーぐわら あしどゥたんとウ、
るじよ、なー、やーかち きゅーんち さんとウ、うどウりし、
ちまーり しゅーたんべちよ。健成あーまたが うんぐるいぬ
たーありよ。なーぬ 精米所ぬ、やーんきや つくてイ あんせー。

田ーあり うんほーなてイ あしどったんべちよ。うんとぬ あぶしから ゐじえッ、ピョンちや とウでイ行き行きえッ、くわわッぐわぬ ゐじよ ちょー かんべぐわ しゅん くわーわッぐわぬ (不明) バタ バタ バタち、ぜーとウえッ、

「あねー、うっちゅんきゃぬ うてイか にやーるしがえー。にしろしがえッ。」ち、むーる いちゅたんべちよ。ちきやわにやわにや てイーてイー。かし、うんから Mぬとウじぬくだーり きゅーたんべちよ。うりに にしたんち。そーてイいいえッ、

「ゐどウ ゐどウ。」ち、いちゃんとう、とウでイや 行き行き しゅーたんちだ。わーきや 敦仁や、うんとウきベー イゅーたしが Kや、てーげんべたな 話しゅたしが⁸。

右は二五年前に実際にあったとする話で、徳之島ではよく知られた話だが、その大意を報告者の本田の文章でみてみると、「浜下りの時、中学生達が、遊んで帰ろうとしていた。大人は各家を回る踊りをしていた。その時、ふーしんこから、田のあぜにそって、子豚のようなのが、ピョンとはね、飛んでは行き行きました。月がよく照っていた。『大人がおれば見せるのにね。』ちょーど、Mの妻が来た。その人に見せた。Mの妻は、その年に死んだ⁸」という。この本田の報告の中の、「大人は各家を回る踊りをしていた」とあるのは、

この日が七月踊りの夜であるということである。七月踊りは奄美大島の八月踊りにあたるもので、その年の豊穰を感謝し、来る年の豊穣を予祝して、集落の安泰を願う祭りである。⁹ このことは後述する神祭りの時の豚の供儀と関係があろう。

この徳之島の夜に出没する豚のムンは、よくみていくと井之川集落のフーシンコ界限に出没するだけでなく、奄美、沖縄諸島全域に分布している。まず、徳之島内の他の集落でも、ユナウワ(夜の豚)、クビキリウワ(首切れ豚)、ジンウワ(地の豚)、ジンモラ(地回り)、ジンムン、ジルムン(いずれも地の物の意)等々と呼ばれ、あちこちに出没して人々を恐れさせている。奄美諸島全域をみれば、ウワークワグワ(豚の子)、クビキリウワ(首切れ豚)、ミンキラウワ、ミンキリウワ(いずれも耳切れ豚)、ジンムン、ジヌムン、ジムン(いずれも地の物の意)等と呼ばれ、沖縄諸島では主に、ウワーグワマジムン(子豚妖怪)、ジンジンワワー(地の豚の意か)等と呼ばれている。

さて、徳富重成によると、¹⁰ 徳之島のユナウワは夕方か夜に出没し、「足音や泣き声もたてずに、チョロチョロと小走りして人間に近づいた」、また、ユナウワは、「右往左往して人間をまどわし、その正体はあまり知られていない」、そして、ユナウワに遭遇した人の話によると、「小型の豚のように見えた」ということである。徳富はつづけて、経験者談を総合して、「ユナウワは小走りして人間に近

づき或いは遠ざかるなど、機敏な動作で逃げ隠れし、時には地面をコロコロ転ったりして、神技で人を惑わすので、大変恐れられていた。地面を転びながら神秘的な挙動をすることから、村人達はこの『ジンモラ』との別称で呼ぶこともあった。ジンは地、モラは回るの意で『地回り』（地回転）と解される。この『ユナウワ・ジンモラ』は人に噛み付き危害を与えることは無いものの、これが人の股を潜り抜けると危害にもまして災難に出会うとのことである。村人達が最も恐れ戦いたのもユナウワの『マタグイリ』（股越え）であつた。股越えを避ける唯一の方法は、ユナウワの通過を待つことで、路傍の土手か石に腰かけて待ったという。また、両脚を組んでピョンピョン跳びながら逸早くその場を去るか、両脚を組んだまま立ち、或はすくんでユナウワの動向を見極め、臨機応変に行動し難を逃れたとのことである。ある年のこと竹籠テイルいっばいの蕃薯ブンシ（薩摩芋・筆者注）を背負って野原ハルから帰る途次に、運悪くユナウワに出会った。村人は暗さと重荷のために咄嗟の機転がきかず、ユナウワを股越しさせたという。村人はこれといった処置をする術もなく黙っていたが、例にもれず翌朝になると高熱を誘発し寝床につき、ついに二日目の晩に急死したという。その頃、村ではこの種の病死に『カディオオーティ（風に会った・邪神に出会った）』として諦めたという話も聞かれる。ユナウワの呼び名は村落によって異なり、『クビキリウワ・ジンムン』（首切り豚・頭のない豚・地ん物・地の物）

などと呼んでいた」と解説している。これによるとユナウワは、地面を転がるようにして人を惑わし、それにマタグイリ（股越え・股下をくぐられること）をされると死にも至るといわれていることがわかる。また、もし遭遇した時に難を逃れる方法として、①路傍の土手か石に腰かけて通り過ぎるのを待つ。②両足を組んでピョンピョン跳びながらすばやくその場を去る。③両足を組んだまま立ち、或いはすくんでユナウワの動向を見極め、臨機応変に行動する。という三つの方法を教示している。いずれもユナウワに股下をくぐられない方法である。ちなみに与論島では夜遊び（青年男女が三味線に合わせて歌を掛け合う遊び）の帰りなどに豚のムンに出会ったら、両足を交差させて、持っている三味線でもなんでも体の横に足のよう立てて、その間をくぐらせるとよいという。また、ユナウワに股下をくぐられて死んだ人に村人は、「カディオオーティ（風に会った・邪神に出会った）」といって諦めたといっている。ユナウワは風のようなもので、邪神だと解されているのである。これは後述する。「役人にとり殺された白豚」の末尾の解説とも一致する。そして、このユナウワの呼び名は、前述したように各集落でちがうということをいっている。

人の股の間をくぐりぬけ、人を取り殺した豚のムンは、村人により神として祀られたのである。このフーシンコの岩神さんのように、村人が神として祀りあげたこと、これはムンから神への転換であり、

そうすることによって厄災をこうむらないようにする方法である。そしてそのうち逆に至福をもたらせるようにという祈願をもそれにするようになるのである。それでは豚のムンのさまざまをみてみよう。

三 ジンムンの出自

前述したように豚のムンの中に、ジンウワ（地の豚）、ジンモラ（地回り）、ジンムン、ジヌムン、ジルムン、ジムン（いずれも地の物の意）と呼ばれるムンがいた。すべて地面を走りまわることからの命名である。

〔事例二〕

向ぬ、イキヨン俣はち行きゅん所ぬ、榕樹ぬ股なん、うんなんにゃジヌムンぬ居てい、夕方なりんにやうるがうじていっち、うりん見りやったんぎんにゃ、うるが人間乗すいてい、山はち行きゅむち。石組はち潜む込でい行きゅむち。ジヌムンな豚にしし、三斗ぶえるかはゆむち。三斗ち言うむんな、米ぬ七、八十斤ぶえるぬくとうーちよ。三斗ぶえるかはゆん豚ぬふどうーしゅむち。

夜や怖るしゃち、がんにゃ寄すかりむすいらんた。

「うれー、うまやジヌムンぬ居んからん、がんにゃ行くなよー」

ち。うつりや、荒藪はち人引ぶち行きゅむち。

（訳） 向こうの、イキヨン俣へ行くところの、ガジュマルの股に、そこにはジヌムンが居て、夕方になるとそれが出て来て、それに見つかったら、それが人間を乗せて、山へ行くそうです。石組の中に潜りこんで行くそうです。ジヌムンは豚のようにして、三斗ぐらいの重さがあるそうです。三斗というのは、米の七、八十斤ぐらいのことですよ。三斗ぐらいかかる豚の大きさにしているそうです。

夜は怖くて、そこには近寄りもしなかったです。

「ほら、そこにはジヌムンが居るから、そこには行くなよう」と。それは、藪の中などへ人を引きずりこんで行くそうです。

右の話は加計呂麻島於齊の話であるが、ここでいうジヌムンは徳之島のジンムンと同じである。ここでは股下をくぐって人命をとるとは話されていないが、「ジヌムンは豚のようにして、三斗ぐらいの重さがあるそうです。三斗ぐらいかかる豚の大きさにしているそうです」と、その正体が豚のようであるといっている。また、人間を乗せて山へ入っていくのは、奄美大島名音集落の神様を乗せた猪に似ている。名音集落では木の枝をくわえた猪は絶対に射ってはいけないという。その理由は、山で木の枝をくわえた猪が走ってくる時は、その背に山の神が乗っている時だからである。またその

山の神は、子供が継親にいじめられ、山に登って神様になったという話と関係している。動物が人間を背に乗せて走る例は広くあり、さしあたり代表的なものに鮭の大助の話等があることを指摘しておく。ちなみにこの話のジヌムンが人の股下をくぐらないのは、「三斗ぐらいかかる」大豚だからである。とても人の股下をすばやくくぐりぬけることができない大きさなのである。次は徳之島天城町松原の「ジルムン」である。

【事例三】

小さい子供が死んだら、以前は雨すだれ（軒下）に埋めるものであったから、その霊が昔はよく出歩いていたという。

夜道を歩くときに、それに股下をくぐられたらいけないから、このジルムンの出るといわれる所では、足を×にして通さないようにしないといけないといわれている¹²⁾。

このジルムンはn音とr音の子音交替で、ジヌムン、ジンムンと同じである。この話ではジルムンの正体を豚とはいわず、幼くして死んだ子供の霊だといっている。その点は違うが、夜道に出没して股下をくぐり、人に災いをおよぼすという。そしてその難をのがれるために両足を×に交差させて通らなければならないという。これらの点では、豚のムンと認識されているジンムンと一致している。

ジルムンの出自が軒下に埋められた赤子の霊と説明するのは徳之島だけではない。奄美大島においても同様の話が聞ける。名音集落川畑豊忠の話である。

【事例四】

ヌッチガ ウルイ ニャ エ ナアマ アティンジャ、ハーガ
リ ミリヤン ウチヌ クワーヤ、ニャ ファカチ チューナミ
ニャ ソーシキヤ スイランムンチチ、アマダルイ ウチナンドウ、
ヌッチガ ソーシキヌ カタチネイシシ オサユンムンジャツカ。
ウルイ イキアンベエ スイランガネイシ ソマツニ シャンギツ
ジャ、ジ・ム・ン・グ・ワ・ナ・テイ イジテイ キュンムン チュカナ。ガー
シ ジ・ム・ン・グ・ワ・ヌ マタン シャーラ アッカツタンギジャ タ
マシキ トウラッテイ ツイマランクウトウ ナリユンムン ナ
テイ ジ・ム・ン・グ・ワ・ヌ イジルイバヤ アゼアツキシ、マタ、ジ・ム・
ン・グ・ワ アッカサンガネイシ シドゥ アッチ イキュンムンドー、
チュン ハナシ トウシキヤタンキヤヌ シモリユタッドー。

（訳） 昔、いや今でもそうだが、あかがり（日の光）を見ないうちの子（死産、あるいは産後まもなく死亡した子）は、墓に、人並みに葬式はしないもので、雨垂れ（屋根から雨の垂れてくる所。軒）の内に、葬式の形のようにして埋めるものだよ。ほら、そのように、よくしないで粗末にしたら、ジ・ム・ンになっ

て出てくるそうだと。そしてジムンに股の下から歩かれたら（股の下をくぐられたら）、魂（ここでは命）を取られて、つまらぬことになってしまうよ（死んでしまうよ）。だからジムンが出てくると、アゼ歩き（足を交差して歩くこと）をして、股の下をジムンにくぐらせないように通るものだという話を年方（年寄り）達はしていらしたよ。^⑬

この名音集落の年方が話していたというジムン（地物の意）が事例三の徳之島のジルムンと同類であることはわかろう。ジムングワの「グワ」は指小辞で、それが小さいことをあらわしている。島は違うが、ともにその出自を赤子の霊、それも普通の埋葬の形をとらずに軒下に埋められたことを強調するところは全く同じである。川畑はこの話のほかに、奄美では有名な今女（女の名）の幽霊^⑭の話をしたあとに、こう話している。

〔事例五〕

ウツカラ ナアーツィヨ、イマジョガ モリシャンド
ロチドウ ハナシヤ シモリュタツカ。ヌツチガ ナゼガマヌウ
イーヌ ヤマミチナン マア トウリユンチュキン シバウ
カンバ シリュサン イングワヌ イジテイチ、メエー ナタリ
ウシリョ ナタリ ニャ ジャマジャマシ ムトウジ ニャ

サキカチ アツカラン ドロヌ アームチュカア。ウン イングワ
ン マタラ ハシリヤツタリ スイッパ、ニャ ヌツチガ タマ
シ トウラリユンチ イチ、マアー イキュン チュキンニャ
シバ ヨウーティ イキャンバ ナラン ドロチチ ハナチモリユ
タツカア。

（訳） それからもうひとつね、今女が亡くなったところだということだがね、ナゼガマ（地名）の山道に、そこを通る時に柴を置いて行かなければ、白い子犬が出てきて、前になったり、後ろになったりして、あとにもさきにも行けなくなる所があるそうだと。そしてまた、その子犬に股の間をくぐられたりすると、その人の魂（命）を取られるといって、そこを通る時には柴を置いてこなければいけない所だと話していたことだよ。^⑮

主人にいじめぬかれた家人（売買自由の下人。農奴であり、明治初年にその解放令がでた）今女^⑯が亡くなったところは、現在でも今女の幽霊が出るといって人々の恐怖の場所である。そしてそこに登場するのが、人の股をくぐって命をとる白い子犬である。豚ではなく白い子犬というのであるが、人の股をくぐって命をとることでは同じである。話の中で、柴を置くとその子犬は出てこないといっているが、それは今女の怨霊の鎮魂のための呪術である。人の股をくぐるのが白い子犬というのは、ここだけではない。たとえば沖縄の

例を鳥袋源七はその著『山原の土俗』^{①7}のなかで、「道の辻を通る時は小股に又は足を交差して歩かねばならぬ。辻には『ジハーハー』又は『ジージーワーグー』が居る。之に股下をくぐられたら死す。此は犬や豚、鳥等動物の化物で、真白い歩くものだとせられている」と述べている。股下を走り抜けるので小さいということ、そして白ということとはよくいわれる特徴なのである。『山原の土俗』の例をみたので、少し沖繩の例をみてみよう。名護市久志には「ナンブル坂のマジムン」という話^{①8}がある。この話では、豚グワーマジムンを追い払う呪法として、石を三つふところに入れる方法を教えている。三つ石という火の神のシンボルであり、ここにその呪力が発揮されるのである。同市屋我地には「連天原のマジムン」という話^{①9}がある。これなどは約七十年前に鳥袋が記したこととほぼ同じ内容で、ジンジンワワーと呼ばれる豚妖怪の話である。

さて先に徳之島での例をあげながら、ジンムン（ジムヌン、ジルムン、ジムン、ジンモラなどを含めて以下同様に使用する）を、地を走りまわるようにうごめくのでその名があると述べたが、単にそれだけではない。事例三、四でみたとおり、その出自は地中に求められる。地中に埋めた赤子の遺体は、犬にあさられるのをいやがることでもわかるように、そう深くは埋めない。だから、この、まだ日の光りも見ずに死んでしまった赤子の怨霊は、夜になると地表近い地中からさまよい出て、地面を走りまわり、人間が通りかかると、

その人の股の下をくぐって命をとっていたのである。いつの頃からかそれが豚のムンと合体して、いろいろな話を派生させていったのである。小さいということを強調するのは、股下をすばやくくぐり抜けるという物理的な理由もあるが、島人には赤子のイメージも重なっていたのである。

四 ミンキラウワの恐怖

事例三のジルムンと奄美大島のミンキラウワ（耳切れ豚、耳の無い豚）の関連を、田畑英勝は事例三の話の注で、「名瀬では『耳キラ豚』^{②0}（耳のない豚）が出るといわれる所があった。それに股下をくぐられると死ぬから、足を×にして通さないようにしなければいけないとよく小さい頃にはいったものである」と述べている。ミンキラウワの話をみてみよう。

【事例六】

小宿と朝仁の間の、一里しか（塚）という所には、耳のない小豚が現れ人々を迷（マヤ）かすといわれており、その時は足を×にあざたらよいそうです。その豚が股を通れば何か危険の前知らせといわれています。又朝仁からちょっと離れた三角濱という所ではきれいな女が、現れてきて、そこを通る人の前になったり後になったりして通行人を困らせたそうです^{②0}。

これは名瀬市郊外の朝仁集落と小宿集落の間の一里塚という怖い場所に、耳のない子豚が現れ出て人々を迷わすという話である。現在では名瀬市街地と朝仁集落、そして朝仁集落と小宿集落の間には近代的なトンネルが通っており、かつての暗い道もなくなったが、昭和四十年代後半まではバスも名瀬市街地から山越えをして朝仁集落へ行き、そこから海辺の道を通って小宿集落へと入ったのである。明治期までの、一人の人がやっと通れる山越えの道ではないが、その頃までは十分に怖い所も通らなければならなかった。この話で怖い所を一里塚といっているのは、後述の道の辻と同様に、境界の空間にムン達が出没することをいっているのである。名瀬市街地でも空襲や二度の大火にとって焼け、再建される以前までは、あちこちに怖い所があり、このミンキラウワが出没して、人々を恐れさせていた。たとえば拝み山の下付近とか、元の県立大島病院（現在の名瀬保健所）の付近は有名であった。

他地域のミンキラウワはどうであろうか。事例四の話者で、奄美のすぐれた昔話の語り手川畑豊忠は、奄美大島名音集落のミンキラウワ（ミンキラウワと同じ）のことを、次のように話している。

〔事例七〕

ワキヤガ ヲウナグンキヤヌ ニヤ ワーサリン、ノノウリ
シュティ ヲナビシュツバ、ニヤ アンマリ ヨデサガデイ ヲ

ナビ シャンギリヤ、トゥナリナン イモリユタン フツシユガ
コーバチ イモチツカラ、「イヤキヤヤ ニヤ フェーク ヤー
チ イキャントウ、マアーヌ コーバン ウシリヨヌ カミミチ
グワラ ミンキリヤウワグワヌ キュースイガ、フェーク イキ
ヤ シラズイ」チ イチ、ガーシ タマガラシュタムンチュッカ。
ガーシ カミミチヤ ムカシカラ ヌーカ アッキンムンチ
イチ、タマガリユタムンチョヤー。

（訳） 私の妻が若い頃、布織り（紬織りのこと）をしていて、夜なべをして、あまり遅くまで仕事をしていたりすると、隣に住んでいた爺さんが工場（紬織りの工場）にいらして、「おまえ達は早く家に帰りなさい。そうしないと工場のうしろの神道から耳切れ子豚が出てくるぞ。早く帰りはしないで」とそんなふうに出ておどかしたような。そんなふうには神道は何かが歩くといつて、怖がっていたんだよ。

話者の妻が若い時の話である。若い娘達が紬工場で夜なべに精出している姿はかつてよく見られたが、大島紬の低迷と織工の老齢化もあって、もう見られない風景である。その夜なべをしている所へ隣の爺さんが来て、「工場のうしろの神道から耳切れ子豚が出てくるぞ。早く帰りはしないで」と注意していたのである。奄美大島の各集落内には、神道と称される小道があるが、その神道に出

るというのである。この神道は、神様の通る道だといい、絶対にふさいではいけない道である。²³たとえそこが現在個人の所有地でも、形ばかりの道を通し、垣にもすきまをあけて、神様が通れるようにしている集落が多い。この神道を、自分の所有地内だからといってふさいだため、不幸が重なったという家が近代的装いの名瀬市街地にもある。神道というのは神だけではなく、ムン達の通る道でもあるのである。

他に名瀬には、カタキラウワー（影のない豚、あるいは片身のない豚のことだという）が出没するともいわれている。そしてそれに命をとられると語り伝える以外に、性器をやられてふぬけになるとも伝承している。またその子豚共にはクレゾール液の臭いがするという。²⁴これは山羊のムンやケンムンが臭いの怪として出没することとも関連するが、「美女に化ける豚」がどうしても臭いを消せなかったことも一致する。

他の島々の豚のムンはどうであろうか。沖縄でも白い豚のムンが人々の股下をくぐって死に至らしめるということは前述した。与論島では、「豚ムヌんちゃ股ぬ下から潜らしばお其ぬ人や死んゆん」、つまり、豚のムンに出会い、股下をくぐられるとその人は死んでしまふ、と信じられている。喜界島ではクビキラウワ（首なし豚）も出沒し、人々を恐怖におとしめている。三井喜禎はその著『喜界島古今物語』²⁵において、「首なし仔豚を股いでも、生霊が飛び出し

て幽霊のとりこになって、一週間前後には生命を落とすこととなると語っていたようであるが、果して、首のない仔豚があらわれるだろうか」と、その首のない子豚の出沒に疑問を呈したあと、「よく、酒に酔った人とか迷信深い人が、暗い夜路をしていて、道に迷いくるくる、幾回も同じ所を、行きつ、もどりつて困った、という話をきくが、こんな場合は、一面に、銀世界のように、どこがどこか見当がつかないという。然るに、其の場に坐り、四方に何でも挿して『ここは、私の今晚の住いである』とて、じいとしていれば、時のたつにつれてだんだん世間が分明して来ると言われている。即ち、魔物が去ったのではなくて、精神が落着き、四囲の分別が定かになって来たためである。子猫や首なし仔豚をみるような時にも、精神をしっかりとちつけて、徐ろに、行動を起こすことが肝要である」と述べて、島人に注意をうながしている。ここで島の知識人三井が、その存在を否定し、それを島人の無知に起因していると述べると、述べるだけ、この島で人々と首なし子豚が共存していると証左になっている。ちなみに三井は首なし子豚の難を逃れる方法として、「其の場に坐り、四方に何でも挿して『ここは、私の今晚の住いである』とて、じいとしていれば」よいと述べている。これはムンの世界と人の世界を分別する仕方、広く行われている方法である。奄美では夜にどうしても山中に泊まらなければならない時は（猟師や木こり等の山仕事をする人に多い）、一間四方くらいの四隅に柴

を立てたり、一間四方くらいを棒で地面に線引きしたりして、「神様、ここをお貸しください。ここは人間のいるところですので、カコティ（囲って、守っての意）下さい。トートガナシ（神様への尊称。神拝みの時の常套句）」などとクチタベエ（口崇べ、唱え言）してから、その中に泊まるのである。つまり、まわりの妖気に満ちた闇空間から、人間のいるべき空間を隔絶させ、「ここは人間のいるべき空間である」と、言挙げして、その言霊と標^{しるし}の呪力でムンの侵入を防ぎ、身を守るのである。

ミンキラウワ、クビキラウワの出没は怖ろしいが、他にもクビキラウマ（首切れ馬）、クビキラヤギ（首切れ山羊）などが夜の道に出没する。欠けたるものはこの世のものではないので、異界のムンであることを、奄美、沖縄の人々は一目でわかるのである。この世のものであるか、そうでないかは、欠損した部分はないか、過剰な部分はないかを見るのが最も効果的である。そしてクビキラウワには豚の頭を神に捧げる等々という供儀のイメージがつきまとう^②。またミンキラウワには、豚を屠殺して、「家に帰りつくとうワンミミ（豚の耳）は子供に与えられる^③」という豚解体の方法と関係があると思われる。そして、宮古島のヒダガンニガイの時、豚の鼻、耳、舌、足、指、爪、乳房、尾、内蔵を神に供えるが、それらの部分の切り取り方とも、豚のムンのイメージは関係していると思われる。

五 豚のムンのいろいろ

ジンムン、ミンキラウワ、クビキラウワなどが人間の股下をくぐり抜け、人を死に至らしめるという話は、述べてきたように奄美、沖縄の島々に広く濃い伝承を持つが、豚のムンはこれだけではない。いくつかみてみよう（美女や美男子に化けて、人と交わる豚は、拙稿「美女に化ける豚」を参照）。

① 役人をとり殺した白豚

「事例八」

宜野灣我如古道に青年の形をした妖怪が毎晩出た。或る首里奉公をする人、夜おそくその道を通つたら、果してその妖怪が立つて居つた。彼は気丈だったので「此方は公事奉公でかくも夜晩く通るのだ、貴様は一體誰を馬鹿にしやがつて此處に立つて居やがるんだい、エ、畜生!!」と云ふなり、唾をはきかけた。すると此の青年は直に白い豚に化けた。それでも彼は平氣であつた。「何だこの畜生」と云つて、今度は持つて居つた松明をブツつけた。怪豚は直ちに又青年に化けた。而して二人は格闘をはじめた。彼の役人は次第に家の方へくくと退いた。妖怪はズン／＼彼の跡を追ふた。丁度幸いなことに彼の隣にはユタ婆（巫女）が居つた。彼は内には歸らず、婆さんの所に行つた。寝て居た婆さんを起こ

して右の話をした。婆さんは茶などを入れて彼の氣を静め四方八方の話をした。夜明方になった。もう大丈夫だろうと思つたので、彼は内に歸らうとした。婆さんも、もう直ぐ夜も明けるから怪物も歸つたでせうと云つた。彼は正門から入らず、垣を越えてソツト内に歸つた。然るに妖怪は執念深くも尚待伏せて居、此を知つてたと見えて、彼は妖怪に取り殺され、翌朝までには冷たくなつて居つた。妖怪は風である、此をいぢめると時々ひどい目に遇ふものである。⁽²⁸⁾

沖縄本島宜野湾での話で、豚のムンが氣丈な役人を取り殺した話である。宜野湾の我如古道には毎晩青年に化けた豚が出没していたという。ある夜、氣丈な役人がそこを通り、その青年に唾をはきかけたという。するとそれに怒つて青年は白い豚の正体をあらわした。それで役人は松明をぶつつけた。白い豚は再び青年と化し、二人は格闘になった。役人は徐々に家の方に退く。役人は危険を感じて隣家のユタ（巫女）の家に飛び込み、ユタを起こして助けをもとめた。ユタは茶などを入れて役人を落着かせ、夜明け方になると、もうすぐ夜も明けるでしょうと、役人を外に出した。役人は正門から屋敷に入らず、垣を越えてそつと入ったが、待ちかまえていた豚のムンにとり殺され、朝には冷たくなつていた。妖怪は風であり、これをいじめたらひどいめにあう、という話である。まず、この豚のム

ンは青年に化けて道の怪として出沒する。そして人間の方から先に何かしないかぎり、危害を及ぼさないとされる。このことは直接的にははっきりいっていないが、末尾に「此をいぢめると時々ひどい目に遇ふ」といって、暗にこの役人が唾をはきかけたり、松明をぶつかけたりしたことが原因で災難に遭つたと述べていることからわかる。また、豚を白豚と強調しているのは、奄美、沖縄のかつての豚が多く黒豚であつたことを考えると、これは特殊な豚であることをいっている。事例五は白い子犬であり、『山原の土俗』に出てくる犬や豚や馬などは「真白い」ものだといっている。白い馬、白い猪、白い鹿等々と同様、本来は神の使者として、あるいは神的なものとして神々しい豚だったのであろう。役人が助けを求めたのがユタであつたのは、話ではたまたま隣に住んでいたということになっているが、この危難を救うことができるのは、やはりユタをおいては考えられない。⁽²⁹⁾しかし、それでもとり殺されたのは、ユタがユタとしての職能を発揮しなかつたからである。つまり、ユタのおもわく違いがあつたのである。話はわざわざ、「もう直ぐ夜も明けるから怪物も歸つたでせう」と、まだ夜が明けていないことをいっている。当然、夜が明けるまでの外の空間は、人間の空間ではなく、ムン達の世界である。翌朝（翌朝というのは夜を起点とした表現）は冷たくなつていたというのは充分に予測がつくことであつた。ここでユタは、ムンを追い払う儀礼をしなければならなかつたのだが、

それを怠ったのである。そして末尾の「妖怪は風」ということわざは、奄美、沖縄で広くいわれている「神は風」ということわざと同類である。³⁰ 島袋は「神は風」ということわざを、話にそくして「妖怪は風」といっているのであり、神とムンはその立脚しているところが、超人間的、超自然的ということによって、同じ基盤を持っているのである。ちなみに徳之島では豚のムンに股下を潜られて死んだ場合、「カディオオーティ（風に会った、邪神に出会った）」として諦めた」ということを前述した。「白い」色といい、「風」といっているのは、沖縄の人々がこの豚を、現実の豚とは異なる世界からやってきた存在だと無意識の中にも知っているからである。青年に化けた豚のムンを挑発し、戦った役人は、ついにムンの退治どころか、逆にとり殺されてしまったのである。これは奄美、沖縄の社会環境が、まだその役人に味方しなかったということである。つまり、まだまだ豚のムンが人々の精神の中で強かったということである。豚のムンはここで退治されず、これから充分に生きていくことを、沖縄の人々の精神が、無意識に選択したということである。

② 杓子に化ける豚

沖縄の豚は、娘に化けたり、青年に化けたりして夜の世界に出没するが、他に杓子に化ける豚が沖縄本島に分布している。

【事例九】

豚ぐわーマジムンリしやるばーてー、豚ぐわーマジムンリし。豚ぐわーマジムンリし。豚ぐわーマジムンぬ歩ちやぐとう、うれーなーあぬー本当ぬくとうやたんり。私達くぬ宮里ぬ、くまーパーマ屋ぬうまぬまんぐらうてい、豚ぐわー逃んぎてい、縛ちグエーグエーしちやぐとう。縛ち入る間、豚ぐわーやんりしが、翌日あかとうんち見ちやぐとう、ミシゲー、ナービゲーなとーたんり。あんすぐとう昔ん人お、木ナービゲー使てい物お食るーぬばーてーや。木ナービゲー、しゃくしぬ木ナービゲーやかんし丸りあたしが、くぬ角ん昔えなーあんしる金んあぐとう、くぬ角んかんししあぬーよーがー、片側よーがなるえーが使いたんよ。

あんすぐとううぬナービゲーや、汁入りーせーナービゲーるやんろー。汁入りーる、お汁入るナービゲーるやんろー。ナービゲーや、まーにん捨てーいんなり。豚ぐわーマジムン、化けたり。縛ち入っしーしが、翌日見ちやれーくぬナービゲーなとーたんり。

（訳） 豚マジムンというのだったんでしょーね、豚マジムン。

その豚マジムンというのが出たらしいんだね。これはほんとうのことだったそう。宮里の、パーマ屋の近くで豚が逃げたので、縛ちグエーグエー泣いて（豚小屋に）入れた。縛ち（豚小屋に）入れる間はたしかに豚であつたんだが、翌日の朝見ると杓子になっていたそう。

昔の人は、木の杓子を使って食事をしていたのである。この木の杓子というのは、こういうふうな（先の方は）丸くなっていたんだが、昔はお金もなくて、角がすりへり片側がゆがむほど使ったんだよ。

だからこの杓子、お汁を入れる杓子だよ。このお汁を入れる杓子にはあっちこちに捨ててはいけないよ。（この捨てられた杓子が）豚に化けて出たそうさ。縛って（豚小屋に）入れたんだが、翌日見たら杓子になっていたそうさよ。

「事例十」

あぬ皆食え物のーねーらん、鰻取ったい、海老取ったいしんがよー、山ぬ中んかい小川んかい行じやくとう。祖母ンメー追ている行ぢえーぎさんどー。

あんひちやくとう、ちゃふえーぬなー真っ黒そーる豚ぬグーグーしよー。うぬ物食でーる田ぬ端でーんてー。あんさくとう、「くぬひゃーやなー、りー二人し、くんちひつちきらやー。」んち、引つちきとーるしじやしが。あぬー、翌日行ぢやくとう、ナビゲーなていよー。

あんしうれー、ミシゲーとうナビゲーとー、物ぬ精ぬち、あんしミンゲーるやてーぎさんでー。やっぱし精ぬあるふーじどー、物ぬ精りち話しみしえーたん。うれー本分に自分くるー見ぢやる

事やたさ。また、マチャーうしぬくぶー引かりーるぐとーたさ。家かい来ねー。

（訳） あのと（昔は）みんな食べ物がなくて、鰻を取ったり川海老を取ったりしに山の中の小川に行った。（その時は）祖母と一緒にいたそうだがね。

そうするとね、物凄く大きな真っ黒い豚がグーグーしていた。（誰かが）食事をした田んぼの端だったのでしよう、すると「この野郎は二人で（捕えて）くびつて（木に）引きつけて置こうね。」と結えてしまった。（しかし）引きつけて置いたつもりだが、その翌日行ってみると、なんと、杓子になっていたそうよ。

それから、ミシゲー（杓文字）とナビゲーに物の精がつき（豚は）ミシゲーだったようだよ。やっぱり物の精はあるらしいね。（昔の人は）話しておられた。それは本分に自分で見た事だったそうさ。家に帰るときはうしろ髪をひかれる思いだったよ。

事例九、十はいずれも沖縄本島の話で、豚が杓子に化ける典型的な例である。両話ともつい最近の出来事として世間話的に話しているが、両話とも「本分ぬくとうやたんり」「本分に自分くるー見ぢやる事やたさ」と、信じている話である。事例十には、ミシゲーは御

飯をつぐもの、ナビゲーは汁をつぐものと注記があるが、つまり、ナビゲーはお玉で、ミシゲーは杓文字のことである。事例九では、マジムンとは幽霊や妖怪のことであると注記しているが、奄美では毒蛇ハブのこともマジムンとして恐れている。マジムンとは何か得体の知れない、この世のものとは思えない存在である。動物のマジムンとして、牛、馬、豚、山羊、犬、鳥、蛇等々がよく出没する。

さて、この化けて出る豚だが、事例十では、「物凄く大きな真っ黒い豚」と話していることからわかるように、年を経た豚は猫と同様によく化けることがある（当然、豚や猫だけでなく、また動植物にも限らず、他の道具等、多くのものが年を経ると化ける。これは古代中国からの伝統である）。それで奄美、沖縄では「豚は長く飼ってはいけない」という俗信が広く濃く伝承されているのである。豚がなぜ杓文字に化けるかははっきりしないが、豚が美女に化けることがよくあることを思うと、杓文字を女の人格の象徴として無意識のうちに認めているのかもしれない。たとえば主婦権を持つことを杓文字を持つとよくたとえられるようにである。

③ つむじのある豚

〔事例十一〕

かじまち豚や買いいんなでいーたせー、なぜかといえ、帆船に
よ、山原帆船に、かじまちやー豚積でーあらんのーあるはじや

しが、うり積り遭難にあつたそうです。山原船が。

そして昔人およー、かじまちやー豚や買いいんなでいー。

（訳） つむじ豚は飼うなということは、なぜかといえ、帆船にね、山原帆船につむじ豚を積んだ。そのためではないはずだが、それを積んだ山原船が遭難にあつたそう。それで、昔の人は、つむじ豚は買うなと言った。

「美女に化ける豚」の稿で、年老いた豚、綾紋様のある豚は飼ってはいけない、という俗信をみてきたが、この話のように、つむじのある豚も忌み嫌われることがわかる。この話の話者は、「つむじ豚は買うな」という俗信の由来譚として話しているのだが、途中、つむじ豚を積んだ山原船が遭難したことに關して、そのため（つむじ豚を積んだため）ではないが、とつむじ豚を積んだことを遭難の理由としてしりぞけようとしている。しかし、おそらくこれは聞き手（調査者）を意識してのことであろう。それは、「それで、昔の人は、つむじ豚は買うなと言った」と結んでいることからもうかえる。少なくとも話者は、つむじ豚を買うようなことはしないと思われる。充分にこの話を信じていることがうかがえる口調である。

④ ものを言う豚

豚の中には急に人間の言葉をしゃべりだすものもある。

〔事例十二〕

これはね八年豚ぬ神でいち、八年生ちちよーたぬ豚ぬ話、豚ぬ。

うぬ豚や、スーメー、うまぬ主人のー唐旅んかいめんーちやぐとう。昔え唐旅でいねー大事やてーぬふーじやー。

そして、なーくれー正月なてい、うぬ豚や殺さなやーんでい思いいねー、「私達あスーメーやがてい来ん。」でいち、むぬ言いたんでいー。しさぐとう今度おまた殺さん、スーメーがめんしえーねー、なー唐旅から帰ていめんしえーぐとうお祝いすんでい、うぬ豚や殺ち祝すんでいるちむえー。しさぐとう、今度おまたん殺すんでいしーねー「私達あスーメーやがていめんせーん。」ちえーういし言ちやぐとう、なーうれーいちぐあん言えーさーに八ヶ年生ちちよーたんでい。

八ヶ年目ねーうぬスーメーや帰ていめんそーち、うにねー殺ちやんでいーしが、うれー八年豚ぬ神でいち付きらったんでい。

（訳） これはね、八年豚の神といって、八年も生きていた豚の話である。

その豚の主人、その主人は唐旅に出られたそう。昔は唐旅といえただならぬことだった。

やがて正月も近くなり、その豚をつぶそうと思っていると、「私の主人はやがて帰ってくる。」と、物を言ったそう。それ

でつぶすことはできなかった。今度は主人がいらっしゃる時、もう唐旅から帰ってこられるので、その豚をつぶして祝いをしようという考えであった。つぶそうとすると、今度もまた、「私の主人はやがて帰ってこられる。」と、そのように物を言ってかれこれして八ヶ年生きていたそう。

その主人は八年目には帰ってこられ、このときには豚はとうとうつぶされてしまった。それは八年豚の神と名を付けられたそう。

これは沖縄本島の話で、「物言う豚」と題して報告されたもので、類話は少ないが、豚が人間の言葉で物を言い、その知恵で八年もの長く命を保った話である。主人が唐旅に出ている留守につぶされようとするが、「私の主人はやがて帰ってくる」と言い言いして、殺されるのをまぬがれたのである。命を長らえたいという豚の知恵のすごさと、豚がものを言うという興味によって語られてきた話であり、豚がいろいろなものに化けて人間と接触してきた奄美、沖縄においては十分に信じられる話であった。「私の主人はやがて帰ってくる」と言ったのは、たんに命を先のばしにしているのではなく、本当に主人と再会したいという豚の意志もあるのである。かつての豚はその家の人の便を食べて育つのであり、現在考えるよりずっと共同生活者としてのきずなは深いのである。美女や美青年に化けて

人間と交わる豚の多くが、その家の豚（交わる相手はその家の息子や娘）であることの意味は、家人と豚の結びつきを考えてはじめてわかることである。「美女に化ける豚」の稿で、なぜ豚が美女（美青年）に化けてその家の青年と交わるかという疑問に、筆者は、誰にも見せたことのない成熟した秘所を、唯一どうどうと観察していたのが豚の目であったからだと述べた。だから、豚はその家の息子（娘）を慕う気持ちが高じて、美女に化けて青年達と交わったのである。当然、その家の息子（娘）とその家の豚というときは、より狭い意味で使っているのであり、このことは、村の青年とその村の豚、という構図になり、そして一般的に「人間の秘所を常々見て育った豚」と「青年」というように、一般的な人と豚の關係に枠が広げられていくのである。だから遊女と化して金をかせぐ豚も出てくるのである。そういった意味も含めて、この物言う豚の再会願望にうそはないのである。現代生活から想像する家畜としての豚よりも、より人々の生活に密着して、かつての豚は生きてきたのである。もちろん、「美女に化ける豚」も、『搜神記』をはじめとする中国説話の影響のもとにあることは前述した。

六 豚の神の呪力

豚の神は高い、豚小屋の神は高神、などと広くいわれているが、これには、「神様が『私は鼠の神様になる』『私は虎の神様になる』

と、子、丑、寅の神様を取り合う。最後に、豚の神様は汚いので誰もいやがってならないが、一番偉い人が『私が豚の神様になる』と言った。それで豚の神様は偉いので、悪い物に会ったときには豚を起こして鳴かせ、災難を避ける⁽⁸⁾」という由来譚がある。鼠、牛、虎等は十二支にあるが、豚は入っていない。もっとも中国では猪年はいわゆる豚年であるが、日本では少し違和感がある。末尾の「豚の神様は偉いので、悪い物に会ったときには豚を起こして鳴かせ、災難を避ける」という俗信は、奄美、沖縄の広い地域で、今もよく伝承されている。「悪い物」は「悪いムン」のことで、「悪い事」などとはけっしておきかえることができない言葉である。奄美、沖縄では夜道でこわいもの（ムン）を見たりすると、豚小屋に行き、豚を鳴かせてから家に入らなければならない。その理由は、豚が鳴くと、身につきまとしてきたムンが離れるというのである。島袋源七は『山原の土俗』の中で、「夜道で化け物を身たり驚いたりした時には、豚小屋に行き豚をなぐって鳴かさねばならぬ。もし鳴かなければ化け物が追うてきている」と述べている。同じことは島を越えて各地でいわれる。与論島では「夜中を過ぎた頃、裏の道を、ひしめき声がして、死棺を担いだ棒のきしむ音を、ギー、ギー、たてながら通って行く物音がする。また誰か死んだなあ、と思っていると、その翌日か、二、三日のうちに、必ず死人が墓場に担がれて行く。こんな物音を聞いた時は、豚小屋に行き、豚を起こしてギーギー鳴かせて

眠るものだと言われている⁽³⁶⁾という。奄美、沖縄では、まだ来ぬ先の葬礼のさまを見たり、察知する（声や音を聞いたりして）ことのできる人々がいる。奄美ではこれをヒンというが、その後必ずそれが現実のこととなるという。この与論島の例はまさに葬列の音を聞いていて、ヒンの予兆である。音は、棺箱を作る音、棺箱のふたに釘を打つ音等がよく聞かれる。そのような時、ムン退散のために豚を鳴かせるというのは、この凶事が、ムンによってしくまれていくと意識しているからである。所によっては、「棒でつついて起こす」、「なぐってでも起こす」等々と、豚を起こして鳴かせるのにもう必死である。これなどはすべて、高神である豚の神の力でムンを退散させようとしているのであり、鶏鳴と同様、豚の鳴き声にはムンを退散させる呪力があるのである。また沖縄の離島などにおいては結婚式の時、嫁は家に入る前にまず豚小屋に行き、豚に先ず結婚の儀を報告するというが、これは豚の高神としての位置をしめすものである。単に家畜として大事な豚だからというわけではない。豚の神が高い神で、大きな呪力を有しているからである。かつて豚小屋と便所が一緒であった奄美、沖縄なので、この神をヤマト式に「便所の神様」ととらえるという意見もあろうが、やはりこの地では、「豚の神」という意識の方が濃厚である。他にも豚の俗信は多く、「豚を殺して食べる夢は凶」というのは、葬礼のイメージの重なりであり、「肉を食う夢は悪い」というのと同様、死者の出るの

を夢で予知するのである。「豚が子を産んでの三日間は金銭のやりとりをしてはいけない、金銭のやりとりをすると子豚は育たない」というのは、人間の行動や言葉を解する豚が、その売られていく将来を見通すからであろう。「山原の土俗」には次のように豚の俗信が列挙されている。「しゃもじや杓子の古物は捨ててはならぬ。白豚の幽霊になるから」、「夜道で化物を見たり驚いたりした時には、豚小屋に行き豚をなぐって鳴かせねばならぬ。若し鳴かなければ化物が追うてきてゐる」、「道の辻を通る時は小股に又は足を交叉して歩かねばならぬ。辻には『ジーハーハー』または『ジージーワーグー』が居る、之に股下をくぐられたら死す。此は犬や豚、鳥等の化物で、真白い歩くものだとせられている」、「豚が巣を造つても雨天」、「豚が台所又は家内に入つて来たら厄災がある。浜降りせねばならぬ」、「豚小屋に唾をはいてはいけない。豚は盲神といふ故、若し唾をはいたら貧乏神になつてしまふ」、「嚏をした時、『糞食へ』といはねばいらない。後生の人に連れられて行く、豚の化物が竹で鼻をつつく」、「豚小屋で驚くものではない。必らず霊が抜け出てしまふ」、「豚小屋におつこちてはいかない。必ず一寸法師になる、又石女または石男なる」、「豚小屋で妖怪火を見たり霊を見たりした時はお願せねばならぬ。其所で見える物は全部自分の霊である」と、「水死者の死体が上がる時は豚の頭を海に投げこまねばならぬ。豚と代つて死体が浮き上る」、「妖怪日（八月十一日）には家の四隅の軒又は豚

小屋家畜小屋、古木の下に薄にて、をを作り立てる。魔除のため、「麦粒症になつた時は、貝殻を豚小屋に吊り下げ、又は末子をして薬指で突かしたらなほる」、「チジヤマは人を呪詛して病を起こさしめる人だというてゐる」。又これは女に多く、時に化けて豚となる時もあるといはれている、「豚の夢は人の呪を受ける」等々である。

他に豚の疫病の時に水字貝やマガキ貝を豚小屋にかけるが、これは豚として日常は家畜であり、霊力が強いといつても流行病には次々と倒れていく現実がある。そんな時、魔除けとして現在も門柱の上などに置いてある水字貝やマガキ貝には、ムンを退散させる呪力があると信じられている。そして、左綱をなつて豚小屋の周囲に張り、疫病の侵入を防ぐのは、左綱は「しめ」として大きな力を發揮するからである。また、糸満漁師たちの海言葉として、豚を「ソーグワチャー」というが、これは「正月」という意味である。豚は正月には食べなくてはならない儀礼食であり、現在も奄美、沖縄では正月に豚を多くとる。それが豚を「ソーグワチャー」と呼ぶ所以である。そして、どうして海では豚という言葉を使ふかというと、人の身代わりとして海に投げられた豚の怨霊から身を守るためである。前述の『山原の土俗』にも、「水死者の死体が上がらぬ時は豚の頭を海に投げ込まねばならぬ。豚と代わつて死体が浮き上る」とあつたが、これだけではない。豚は常に人間の身代わりとして神に捧げられてきたのである。⁽³⁷⁾

奄美、沖縄では、「豚のムンが股下を潜るとその人は死ぬ」と広くいう理由は、ジンムン、ミンキラウワの稿で既述した。「道の辻を通る時は小股に又は足を交叉して歩かねばならぬ。辻には『ジーハーハー』又は『ジージーワーグー』が居る、之に股下をくぐられたら死す。此は犬や豚、鳥等の化物で、真白い歩くものだとせられている」というのも同じである。道の辻や村境等、境界の空間は異様な空間であり、ムン達の集い寄る怖い場所（道俣）なのである。

七 まとめ

豚のムンがいかに多様な姿で奄美、沖縄の夜に出没するかを論述してきた。このヤマトにはいない豚のムンも、目を諸外国に転じてみると、やはり多様な形で存在する。

「一 はじめに」では、その例として、中国は『山海経』の「𪛗封」、『搜神記』の「夜這いする雌豚」、『聊齋志異』の「杜翁」、アルゼンチンは「鎖つきの雌豚、ブリキの雄豚」、そして「土曜の夜ごとに変身する若者」等をあげた。

「二 フーシンコの岩神さん」では、神に祀られた豚のムンを考察することにより、豚のムンの所業を鎮めようとする人々の方法をみた。すなわち、徳之島で月夜の晩に次から次へと現れ出て、人の股をくぐり、人をとり殺す豚のムンを祀り鎮めている信仰をみた。このフーシンコの岩神さんは、現在では町の文化財にも指定されて

いて、人々がこのことをいかに恐れていたかがわかる。そしてそれが七月踊りの夜に現れ、アムトガナシに消え入ったのは、かつてこの夜に供儀された豚達の怨霊のなせるわざと解釈できる。そしてそれはまた、ジンムンの稿でも述べたが、祀られることがないまま軒下に埋められた赤子達の怨霊とも考えられる。ここでは人にかみつきなどはしないが、人の股下をくぐりぬけて命をとる豚のムンが、ユナウワ、クビキリウワ、ジンウワ、ジンモラ、ジルムン（以上徳之島）、ウワークワグワ、クビキリウワ、ミンキラウワ、ミンキラウワ、ジンムン、ジヌムン、ジムン（他の奄美諸島）などと呼ばれて広く存在することをみた。そして、その豚のムンから身を守る方法として、①路傍の土手か石に腰かけて通り過ぎるのを待つ。②両足を組んでピョンピョン跳びながらすばやくその場を去る。③両足を組んだまま立ち、或いはすくんでユナウワの動向を見極め、臨機応変に行動する。④持っている三味線でもなんでも体の横に足のように立てて、その間をくぐらせる、という方法を説いた。なお、「三 ジンムンの出自」で、奄美大島での足を×に交又させながら歩くという方法を、また、「四 ミンキラウワの恐怖」では、その場にすわり、四方に何でも挿して、「ここは、私の今晚の住いである」といって、じいっとしているという方法を付加した。そして、豚のムンに股下をくぐられて死ぬと、人々は「風に会った」といってあきらめたという。これは後述した「妖怪は風である」と

説明していることと一致する。広く奄美、沖縄では「神は風」ということわざがあることを指摘し、その中で、妖怪は人間界（日常界、自然界とでもいおうか）と対立する超人間界のものとして、神と同じ方向にあり、かつ、神と対立するものであることを述べた。また、その豚のムンが「ユナウワ（夜の豚）」と呼ばれるのは、日中の豚、つまり日常の家畜としての豚ではなくて、夜の世界の生き物、つまりムンであることを人々は知っていたのである、と説いた。

「三 ジンムンの出自」では、ジンムン、ジヌムン、ジムン、ジンモラ、ジンウワがすべて地面を走りまわるムンであることをいい、その出自を、まだ明りを見ぬうちに死に、人並みに葬儀も出してもえず、軒下に埋められた赤子の霊であるとした。その赤子の怨念が、子豚の形をして夜の世界で、地を這うように動きまわり、人々の股下をくぐろうとしているのである。小さく地面を這いまわるというのは、股下をくぐるのには物理的に小さくなければならないということもさることながら、やはり赤子のイメージがつきまとうているのである。豚のムンが小さいということは、子犬のムンが股下をくぐることもあわせて考えねばならない。そしてこれらがヤマトのスネコスリというムンと同類であることも重要であり、その関係は特筆しておかなくてはならない。

「四 ミンキラウワの恐怖」では、この耳の切れた豚のムン、首の切れた豚のムンを、神に捧げられた豚の怨霊の化したものだと考

えた。それは、欠けた部分のあるもの、過剰な部分のあるものはこの世のものではないことが知られているからである。ここでは供儀の仕方との関係で豚のムンをみてきた。

「五 豚のムンのいろいろ」では、各地にいる他の豚のムンをみた。「① 役人を取り殺した白豚」では、豚のムンを退治できず、逆にとり殺された役人の話をみた。これはユタ婆の思惑違いによって生じた失敗であったが、とりもなおさず、社会環境（人々の精神生活）が話を失敗に導くような状況であったのである、ということを書いた。このムンは、人間の側から先に何かしないかぎり、危害をおよぼさないとあったが、これは多くのムン達に共通することである。ここでは、「白い色」と「妖怪は風」ということわざを中心に論じた。「② 杓子に化ける豚」は、沖縄本島に広く濃く伝承されているが、ここでは、最近本当にあった話として信じられているということに注意した。またマジムンの意味について少しく説明した。「③ つむじのある豚」は、「つむじのある豚は買うな」という俗信の由来であるが、これは年老いた豚、綾紋様のある豚は買うなという教えと同類である。かわった豚は、かわった力を有しているのである。「④ ものを言う豚」は、人間の言葉でものを話し、命を八年もながらえた豚の話である。ここでは知恵でもって延命したという笑話的なとらえ方ではなく、本当にこの豚は主人と再会しなかったのだということを、人と豚とのかかわり方から説いた。

「六 豚の神の呪力」では、豚の神は高いという俗信をはじめ、いくつかの俗信から豚をみる非日常の目をみた。特に、「夜道で化物を見たり驚いたりした時には、豚小屋に行き豚をなぐつて鳴かさねばならぬ、若し鳴かなければ化物が追うてきてゐる」、「結婚式の時、嫁は家に入る前にまず豚小屋に行き、豚に結婚の儀を報告する」などというのは、豚の神がいかに高い神であるかということである。また、豚の鳴き声は鶏鳴同様、ムンを退散させる呪力を有していると説いた。そして糸満では海言葉として「豚」という語を忌み、「ソーグワチャー」と呼ぶことについて、それが神への捧げものとして海に流された豚の怨霊から身を守るためであると論じた。それは、「水死者の死体が上がらぬ時は、豚の頭を海に投げこまねばならぬ。豚と代つて死体が浮き上る」などという話がよく聞かれることからわかる。このことはまた、宮古島の豚の頭部だけを切り落とし、海のかなたの神々に捧げる祭りをみるとよく理解できる³⁸。糸満の漁師が海では「豚」という語をつつしむのは、海中、海上にさまよう供儀された豚の怨霊を恐れるからである。

最後にこの小論は、拙稿「豚智入りとその周辺」³⁹、「美女に化ける豚」⁴⁰、「中国説話文学にみる豚妖怪」⁴¹、「豚の昔話・伝説―中国少数民族の民間故事より―」⁴²、「豚の民俗」と一連の関係をj持って書いたもので、主に子豚のムンを、スネコスリ、赤子の怨霊、欠損した動物達等々との関連を通して論じたものである。

注

(1) 『山海經』は、「中国古代の地理書。著者は不詳。最も古い部分

は戦国時代(紀元前五〜後三世紀)にわたって他の部分がつつぎに付加されていったとされる。洛陽周辺の山々と、そこから四方に伸びる山脈を考えた「五藏山経」、その周囲に存在すると考えられた国々のことを記した「海外経」「海内経」など、一八巻よりなる。各地の山川に産する草木・鳥獸、虫魚、そこに住む鬼神・怪物の記述は空想的かつ怪異なものが多く、中国の古代神話を知るうえで貴重である。晋の郭璞(かくはく)が注を加え、清の郝懿行(かくいこう)によりさらに詳細な注と校定がなされた」(高馬三良訳『山海經—中国古代の神話世界—』平凡社・一九九四年一月)書物。豚のムンについては、『山海經』第七海外西経に、「犴封在巫咸東、其狀如鼯、前後皆有首、黑」

(袁珂柱注『山海經柱注』上海古籍出版社、一九八〇年七月)とある。

(2) 「猪妖怪して女となり、李汾に通ず」李汾は、越州上虞縣の人なり、性山水を悦び、乃ち四明山に居る、山下に百姓張老の莊あり、其家人に富み、好んで家を養ふ、積年宰(ころすこと)せずして之を縦つ、永和の末、中秋(八月十五夜)月圓なり、李汾月に中庭に歩し、琴を撫して自適す、忽ち外に人の嗟嘆するの聲あり、或は言ひ或は笑ふを聴く、李汾其由を測らず、詰りて曰く、何人か夜久くして此の山院に至るやと、女笑うて曰く、惟秀才の妙響を好するのみと、汾門を開きて之を見るに、一女の端正比なきを見る、惟口に、高緇黑色(深黒色)を帯ぶるを覺ゆ、汾問ふ娘子は是れ神仙なる莫らんやと、女對へて曰く、非なり、兒は是れ此の山中の張家の女なり、今夕父母東村に客と作るがゆゑに、竊に來りて奉謁す、希くは責めらるるなかれと、汾欣喜し、娘子に謂て曰く、荒居を棄てずんば、便ち請ふ階に

升れと、言訖りて、女子乃ち階に上り、茶を煎じて言笑相諱す、汾能く及ぶなし、帷を下し、燈に背き、琴瑟已に盡つ、忽爾晨雞曉を報ぜり、女起ちて告辭す、汾戀慕して別を惜しむ、即ち女の青氈の履子一隻を偷み、衣籠中に藏す、汾恍忽睡著す、女汾を撫して悲泣し、履子を求覓むらく、願くは此を留むる忽れ、今夕再び期せん、若し此を収めば、妾が身必ず死せん、今君子に拜謝す、幸に留むる忽れと、汾竟に與へずして睡る、其女號泣して去る、汾驚きて覺むれば、其女を見ず、只床前に鮮血地に滿つるを見る、汾心に之を異し、乃ち籠を開きて其履子を見るに、已に化して猪の蹄殻と為れり、乃ち怕懼れて已まず、血を尋ねて山を下り直ちに張公の園内(獸を入るかこひ)に至りしに、其猪還汾の來れるを見て、目を瞋して咆哮す、已にして汾具に前事を以て張公に告ぐ、公之を聞き驚き怪し、遂に之を烹る、汾乃ち此の山院を棄てて、別に他邑に遊ぶ、悲しい夫、妖怪の事は顯然、蠱惑の道は彰爾たり、人の形を假り(以下闕文)(鹽谷溫訳注國譯漢文大成)文學部第十二卷 一九二四年八月 國民文庫刊行會)

(3) 拙稿「美女に化ける豚」(『昔話伝説研究の展開』所収、一九九五年三月、三弥井書店)

(4) 『聊齋志異』は中国清代の志怪書、中国志異文学の集大成ともいわれるもので、作者は蒲松齡。卷六に美女に化した豚にばかされた杜翁の話がある。

杜翁、沂水人。偶自市中出、坐牆下、以候同遊。覺少倦、忽若夢、見一人持牒攝去。至一府署、從來所未經。一人戴瓦壠冠、自内出、則青州張某、其故人也。見杜驚曰、杜大哥何至此、杜言、不知何事、但有勾牒。張疑其悞、將為查驗。乃囑曰、謹立此、勿他適。恐一迷夫、將難救挽。遂去、久之不出。惟持牒人來、自認其悞、

釋令歸。杜別而行。途中遇六七女郎、容色媚好、悅而尾之。下道、趨小徑、行十數步。聞張在後大呼曰、杜大哥、汝將何往、杜迷戀不已。俄見諸女入一圭竇、心識為王氏賣酒者之家。不覺探身門内、略一窺瞻、即見身在荳中、與諸小猓同伏。豁然自悟、已化豕矣。而耳中猶聞張呼。大懼、急以首觸壁。聞人言曰、小豕顛癩矣。還顧、已復為人。速出門、則張候於途。責曰、固囑勿他往、何不聽信。幾至壞事。遂把手送至市門、乃去。杜忽醒、則身猶倚壁間。詣王氏問之、果有一豕自觸死去。(會校會注會評本、張友鶴輯校、上海古籍出版社、一九七八年四月刊)

(5) ホルヘ・ルイス・ボルヘス著『幻獣辞典』には「鎖つきの雌豚、その他のアルゼンチン動物誌」と題して次のような興味深い事例を紹介している。『アルゼンチン民間伝承辞典一六〇ページで、フェリクス・コルグシオはこう記している。コルドバ北部、とくにキリノスあたりに伝わる鎖つきの雌豚は、ふつう夜ふけにその存在を知らせる。鉄道駅の近くに住む者たちはこれが線路を滑走していくと語り、またその《鎖》で耳を聳する響きをたてながら、電信線をつたって走るのも珍しくないという者もある。いまのところ、この動物をちらりとみただけすらひとりもない。捜そうとすると、不思議にも姿を消すからだ。鎖つきの雌豚(チャンチャ・コン・カデナス)は、ブリキの雄豚(チャンチョ・デ・ラタ)ともいわれ、ブエノスアイレス州では川ぞいの小村や町にもひろく伝わっている。アルゼンチンには人間狼が二種類ある。ひとつはウルグアイやブラジル南部にまで伝わるもので、ロビンソンという。だがこの地域には狼が棲んでいないので、人間は豚か犬の姿になるといわれる。エントレ・リオスの町や村では、少女たちが屠殺場付近に住む若者を避ける。土曜の夜ごとに、この若者たち

はいま挙げた動物たちに姿を変えるといわれるからだ。中部地方には、チグレ・カピアンゴがいる。この獣はジャガーではなく、思いのままにジャガーに姿を変える人間である。ふつうこれの目的は他愛ない冗談のつもりで友人を驚かすことにあるが、^{追剥}剥たちもこの変装を用いた。前世紀の内乱期間、ファクンド・キロガ將軍はカピアンゴの全軍を指揮下におさめているという風説があった(柳瀬尚紀訳 晶文社 一九七四年十二月刊。ただしここでは九二年二月刊のものを使用)

この中で、若者達が動物に姿を変えるといふ発想は、日本においてはなじめないが、諸外国においては、さほど珍しくない。ちなみに魔法によって変身する話は、「蛙の王女」、「美女と野獣」、「七羽のカラス」、「白い嫁黒い嫁」等々、枚挙にいとまがないほどである。

(6) 拙稿『捜神記』説話にみる豚妖怪(『国語の研究』第二三号 一九九六年八月刊 大分大学国語国文学会)

(7) 鹿児島県大島郡徳之島町の『徳之島町文化財指定台帳』の民俗文化財第三三号が「フーシンコの岩神さん」で、所在地、所有者等が明記されている。

(8) 本田碩孝『池水ツル姫昔話集』 自家版 一九八八年三月刊)原文は横書きであるが、それを縦書きに改めて引用した。その際、算用数字を漢数字におきかえるなどした。

(9) 奄美大島の八月踊りに相当するのが徳之島の七月踊りである。八月踊りが旧暦八月の新節、しばさし、どろんがのいわゆるミハチガツの一連の祭り日に踊られるのに対し、七月踊りは旧暦七月の浜下りの時に踊られる。名称も浜踊り、七月踊り、八月踊り、夏目踊り、千人踊りなどとそれぞれの集落で差異がある。井之川の浜下り習俗については町田進氏が郷土史講座(井之川の浜下り・夏目踊り)昭和六十年

十月)で研究発表している。それによると、井之川の「浜下り」は、ウヤコシ祭とも、シモの遊びともいわれ、盆後の丙・丁・戊の日柄に行なわれます。一日目：ヒノエの日は、一族そろって定まった所の浜を掃除して祭の準備をします。現在は簡単になっていますが、昔は細い木(インマル)や竹などで骨組を作り、陽よけのために芭蕉の葉やムシロなどでおおった「ヤドゥリ」と呼ぶ仮小屋を作りました。今でもインマルや竹などで骨組だけを作るところも何組かあります。奇麗に浜掃除が終わると「カマ」を作ります。カマは三個の潮気のある平たい白い石でコの字型に作ります。カマの位置はヤドゥリの上座です。カマの上には「カシリ」を作って置きます。カシリはワラで約一五cm位の輪を作り、竹の小枝を十文字に交差したものです。ヤドゥリができ、カマとカシリの準備が終わったら、カマに酒を供えて祭ります。祭りをする人は大体それぞれの一族の長老の男がします。このカマ祭りが終ると第一目の祭りは終ります。二日目：ヒノトの日は、午後四時頃になると一重一瓶を持ってそれぞれの「ハマウリヤドゥリ」に行きます。そこでは年令順に男女向かい合わせに座ります。一番年長の主婦が重箱のフタにそれぞれの家の料理の初を入れ、酒と共にカシリの upper に供えて祭ります。これも「カマ祭り」です。暗くなるまで一族の人達が和やかに祝をします。また、前年の浜下りから今年の浜下りまでに生まれた子供を「新浜踏マシ」といって浜下りヤドゥリに連れて行きます。一族の人達みんなが「新子」に酒をあげて賑やかに祝います。七時半から八時頃になると一族の人々は解散して家に帰ります。夜には、踊りがなされますが、この踊りを井之川では「夏目踊り」と呼んでいます。護岸の広場で夏目踊りは踊り始められ、やがて一軒一軒を一晚中かかって踊り歩きます。踊り廻る順序は、今年東から入りこめ

- ば、来年は西から入りこむというように毎年交代します。先ず、踊りの集団が庭に入りこむと何処の家でも、酒やビール、ジュース、料理、菓子などを出して歓迎します。また、タオルなどをくれる家もあります。庭先での踊りが終わると隣の家へと踊りの集団は移って行きますが、その時には「ドンドン節」を歌いながら移動します。三日目：ツチノエの日は、家々を廻り終ると、最後に踊ることを「踊りトウミイリ」と云います。この場所は宝島はイビ加那志、伊宝は以前はコンチビ、現在は新築した家、佐渡は八幡神社でなされ、そこでは必ず「三ぐだり」踊られます。踊る曲目は「でんだらこ加那志」、「あつたら七月」、「城ゆり(とうゆみイ)」であります。二十年位前までは、夏目踊りが終わったら「ネインケ」といって、村中の子供や青年達は水のかけ合いをしました。残念ながら現在は行なわれていません。／午後四時頃から「ハマギノ」と云って、公民館に「ツマミ・カラカラ」を持参し村中の人が集まり、夏目踊りをして過ごします。昔から「ツチノエ」の日柄はキレビユリと云って、仕事(特に針仕事)はしなかった。(『徳之島の七月踊り歌』、徳富重成編集・徳之島町合併三〇周年記念事業実行委員会・教育文化部会企画、一九八八年十一月)
- (10) 徳富重成『徳之島の怪異』『南島研究』三〇所載 南島研究会編 発行 一九八九年十一月
- (11) 登山修『瀬戸内町の昔話』 同朋舎出版 一九八三年八月刊
- (12) 田畑英勝『徳之島の昔話』 自家版 一九七二年二月刊
- (13) 田畑千秋採集資料
- (14) 奄美瀬戸内町の伝説で、今でも今女(下女の名)の幽霊が出るとこわがられている。ある豪農に家人(売り買い自由の農奴)として売られた美女今女は、主人に思われたが、その妻の嫉妬にあい、いじめ

られ、とうとう自殺してしまった。その今女の怨霊が今でも瀬戸内町のある所を通ると出て、人々を呪うという。

(15) 田畑千秋採集資料

(16) 瀬戸内町嘉鉄の嘉原家の人が苦しんでいる今女を介抱したので、その嘉原家の子孫にだけは危害を加えないという。それで、今女の幽霊が出たら、「私は嘉家の子孫どー」と言えば、今女の幽霊は納得して消えるという。

(17) 島袋源七『山原の土俗』郷土研究社 一九二九年二月刊 ここでは『日本民俗誌大系』第一巻 角川書店 一九七四年九月刊を使用

(18) 「ナンブル坂にはね、昔からマジモン(魔物)がたくさん出よったそう。それで、こっちでたくさんの方が魂を取られているらしい。私が十八歳に紡績に行ったとき、私の母が私を送った帰り、遅くなつてからこのナンブル坂を通つた。そしたら、豚グワーマジモンがたくさん出た。『これはあぶない』といって、しゃがんでるわけよ。豚グワーマジモンを股の下から通したら魂を取られるからね。そして、そこで石を三つ拾つてふところに入れたら、この豚グワーマジモンたちは、みんないなくなつていた。『名護市史編さん室編』久志の民話 名護市教育委員会 一九九一年三月刊

(19) 「連天原には、ジンジンワワーというマジモンが出よつた。ジンジンワワーというのは、小さい豚みたいなマジモンで、夜、道を歩いておる人の足に、まちぶつてへからみついてきたそう」(名護市史編さん室編『屋我地の民話』名護市教育委員会 一九九二年三月刊)

(20) 田畑英勝『奄美大島昔話集』 自家版 一九五四年二月刊

(21) 一九五五年十月に一一八棟、十二月に一二六五棟焼失の大火があ

り、旧名瀬市街地の大半は焼け、その後都市計画などのため街並みは一変した。戦前までは今の市役所付近、ホーリネス教会付近にもミンキラウワが出るおそれられていた。いずれも昼でもうす暗く、数もあり、淋しい所であった。

(22) 田畑千秋採集資料

(23) 今では狭い路地のようになっている所が多い。人の屋敷の中を通り、石垣、ブロック塀にすきまを開け(途切れさせ)ても神の通り道として優先させている所が多い。

(24) 恵原義盛『奄美のケンモン』 海風社 一九八四年八月刊

(25) 三井喜禎『喜界島古今物語』 自家版 一九六五年二月刊

(26) 沖縄県宮古群島の伊良部島前里添、池間添の二集落で今も厳粛に行なわれているヒダガンニガイ(ヒダガンは海の神の意で、リユーキューヌカン(竜宮の神)ともいう)は豚を犠牲にする典型的な祭祀である。ヒダガンニガイは海の神祭で、航海安全と大漁を願うものである。ヒダガンニガイは旧二月と十一月に行なわれる。比嘉康雄の報告によると、「当日早朝、豚を犠牲にすることからこの祭祀は開始される。犠牲の豚は漁業従事者の各戸供出の祭費で購入された成豚である。前里添、池間添のそれぞれの船だまり(浜)に前後の足をしばられた豚一頭がそれぞれの区長とムラの役員たちによって運ばれ、供えられる。一九九二年三月の前里添の場合は、午前六時に豚の犠牲の儀式がおこなわれた。ウフンマは神衣(白衣)を着装し、犠牲の豚のまわりを左足親指で左まわりに円を描く。犠牲の豚の頭部は司らの方向に向いている。終ると、前図(省略)の座順に座し、ウフンマが司祭して礼拝がおこなわれる。全員掌を上にして神詞を唱えながらおこなっている。数分で終ると、区長らが犠牲の豚を船だまりの水際で屠殺解体する。喉を

突き血を流し捨てる。血は供えない。ウパツと言って豚の鼻、耳、舌、足、指、爪、乳房、尾、内臓各部を少しづつ切り、供え物とする。また、左前足部一斤、左後足部二斤の肉は特別にとり、これをゆで肉にして六個の碗に入れて供える。それ以外は祭場近くの大鍋でゆでられる、「一通りの供え物の分配が終ると、ナカンマは犠牲の豚の頭を持ち前方の海に投げこむ」(比嘉康雄『神々の古層⑩、海の神への願い』ニライ社 一九九二年十二月刊)。他に奄美、沖縄に広くみられるシマクサラシの行事や、病人の身がわりとして、神に豚を捧げる祭祀は多くの島々に広く行なわれる習俗である。またそのことを歌い込んだ沖永良部島のユタの呪詞「ワーフガミ」は対語対句仕立ての長編の神謡である。

(27) 田畑千秋『奄美の暮しと儀礼』 第一書房 一九九二年三月刊

(28) 佐喜真興英『南島説話』 郷土研究社 一九九二年五月刊 ここでは『日本民俗誌大系』第一巻 角川書店 一九七四年九月刊を使用

(29) ユタは民間祭祀者として、妖怪や悪霊(死霊、生霊、もろもろの精霊)を追いかつ呪力を有している。豚に関して言えば、沖永良部の「ワーフガミ(豚拌み)」の神謡を伝承管理していたのはユタだし、『南島雑話』には、病氣快復の祈願に、豚を身替りに立てなければならぬといいて、豚を不当に要求するユタの弊害が載っている。こういうことは昭和時代になってもよく話題になった。

(30) 「神は風」ということわざで印象深いことは、昭和四十六年の夏期休暇にケンムンの調査をしている時の経験である。名瀬市の腰俣の屋仁川上流で涼んでいた老婦人に、「ケンムンの話を聞かせて下さい」と言っていたところが、その老婦人は青ざめて、「こんなところで(屋外で)、いらぬ言葉を言うな」と言った。それでもその意の察しきれない私が、

「ケンムンはどんな姿をしているのですか」と聞くと、その老婦人、顔をこわばらせて、「いらぬことを言っ、神は風ぞ」と言うが早いか、恐怖に会ったように立ち去っていった。また、高校時代の友人の家の庭で同じ頃、八十数歳であった友人の祖母にケンムンの話を聞こうと、「ケンムンとはどんな姿をしているのですか」と聞くと、急におびえた顔になり、「神は風ぞ」といい捨てるようにして、いそいで家の中に入ってしまった。その様子に驚いた私が、友人におばあさんを見てきてくれという、友人は見に行き、「君が急に外で変なことをいうので、蒲団をかぶってこわがっている」と言った。こういったことが奄美ではよくある。外の空間はたとえ昼でも屋内とは違うのであり、ムン達はいつも風となってやってくる可能性があるのである。また、これらの調査から、神とムンとは超自然的な存在として同じ空間に属しているものと思われる。

(31) 読谷村立歴史民俗資料館編『波平の民話』 読谷村教育委員会 一九八九年三月刊

(32) 読谷村立歴史民俗資料館編『喜名の民話』 読谷村教育委員会 一九八〇年三月刊

(33) 読谷村立歴史民俗資料館編『渡慶次の民話』 読谷村教育委員会 一九八五年三月刊

(34) 読谷村立歴史民俗資料館編『儀間の民話』 読谷村教育委員会 一九八三年三月刊

(35) 稲田浩一、小澤俊夫責任編集『日本昔話通巻』第二十六巻沖縄同朋舎出版 一九八三年七月刊。初出は『じーる』四

(36) 栄喜久元『奄美大島と論島の民俗』自家版 一九六四年十二月刊

(37) 現在でもユタの指示によって豚肉を捧げることがある。注(26)、

(29) 参照。

(38) 伊良部島のヒダガンニガイなどはその典型的な祭祀である。注

(26) 参照。

(39) 田畑千秋『豚簞入』とその周辺『沖縄文化研究』五所載 法政
大学沖縄文化研究所編発行 一九七八年六月刊

(40) 田畑千秋・陳冠瑛訳「豚の伝説・昔話―中国少数民族の民間故事
より―」『奄美の民話』第二号所載 奄美民話の会編 一九九七年三月
刊